

## 蒸物

〔三好筑前守義長朝臣亭江御成之記〕一三月卅日、祿四年○永 御成略○中

一總衆へ參獻立○中、小西仕分略、二獻さしみけづり物あへ物

〔醒睡笑三〕一あるひとり坊主、鳥賊をくろあへにしてたまはる處へ、ふと人來れり、口をぬぐはん  
料簡もなかりつるに、そなたの口は、何とてくろひぞや、かねをつけられたかととふ、いやはん  
さむさに、たゞいまもえさしを、一口ぐふたと。

〔醒睡笑八〕一會下僧に齋をする、菜に蕨あり、終に服せず、施主如何なれば、蕨をば食せられぬぞ、  
人のくちやかふとて、大事候まひ。けしあへにしてさうほどに、

〔倭名類聚抄十六〕蒸 菜菜羹 禮記注云、蒸私列反、師說蒸也、野王按、蒸反之繩

火氣上行也。

〔箋注倭名類聚抄四〕按廣韻、蒸、蒸也、餘制切、禮記釋文、渫字音義同、廣韻又云、渫治井、又除去、私列  
切、是渫渫雖同字、然私列可以音除去字、源君以私列音蒸、渫非是、按无之毛乃蒸物也、蒸訓车之牟  
須、謂鬱熱爐々、今俗謂溽暑爲牟之阿都之是也、

〔伊呂波字類抄無〕蒸ムシモノ 茄 飽アサツキ 蒸亦作渫ムシモノ

〔庭訓往來〕御齋之汁者○中、菜者○中、蒸物、茹物、

〔東雅飲食〕蒸ムシモノ 倭名鈔に禮經を引て、蒸は蒸也、師說にムシモノといふ也、蒸は玉篇に、火  
氣上行するなりと見えたりと註せり、凡火氣上行するを云ひて、ムシともムスとも云ひし、義詳  
ならず、

〔倭訓栢中編二十】むしもの 和名抄に蒸をよめり、蒸也と注せり、大和物語に、菜をむしものと  
いふ物にしてとみゆ、

〔大和物語下〕日もたかうなれば、此女のおや、少將良岑にあるじすべきかたのなかりければ、こ  
どねりわらはばかりとめたりけるに、かたいしほざかなにして、酒をのませて、少將にはひろ